

算数

➔ 6年生 | 全単元を通じて

「教え合い」で学力向上

1. 最高学年らしい算数を

6年生の算数授業は、小学校の算数授業の集大成である。ここでどれだけ本物の学力をつけて卒業させるか、どのように中学校へつなげるかをいつも考えて授業に臨んでいる。

そこで大切なのは、子ども同士が「教え合うこと」であると考えている。どの単元でも、習熟度を試す問題を解く時間を中心に、教え合う場面を授業に取り入れて繰り返す中で、教え合いの質を高め、全員の学力が伸びるように取り組んでいる。

2. 習熟度に差が出ることを当然と考える

書いてみると当たり前のことのようにだが、クラス全体が上記のような考えを持ち、なおかつ算数が苦手な子どもたちがあきらめない雰囲気をつくるのは難しい。しかし、これなくして本当に効果的な「教え合うこと」は成立しない。

日頃から、「人には得手・不得手があり、それは恥ずかしいことではないこと（スポーツの例がわかりやすい）」、「自分だけでできればよいという考えよりも、全体を引き上げようとする考えが上位であるということ」を、浸透させておく必要がある。

3. 教え合いの仕方を子どもと考え、つくり上げる

「さあ、できた人、まだの人に教えてあげなさい」と言って、すぐに上手に教えられる子どもはそうそういない。だから、どんな教え方をするのかをきちんと指導しなければならない。さらに、その教え方は「教える側」「教えられる側」双方のニーズにできるものでなくてはならない。

そこで、まず子どもがどんな教え方をしたいか、どのように教えてほしいかをリサーチした。それら

をまとめると、「わかりやすさ」ということに行き着いた。教える側にとっては、「教え方」のシンプルなルールが必要であり、教えられる側にとっては、解答までの道筋をはっきり示してほしいということである。

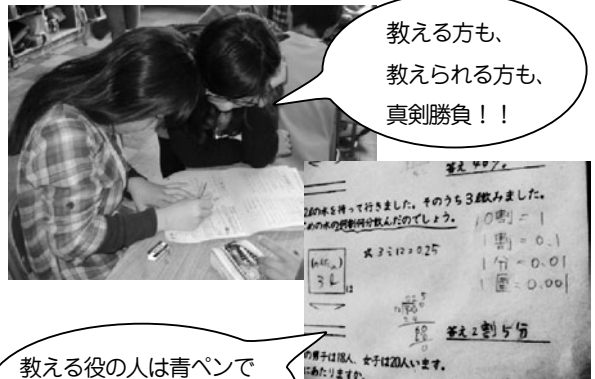
そうしてできあがった「教え合いのルール」は、以下の通りである。

<教える側>

- ①絶対に答えは教えない。
- ②目で見てわかるように教える。
- ③教える側同士で教え方の情報交換をする。

<教えられる側>

- わからないときは、はっきり意思表示する。



教える役の方は青ペンで
アドバイス等を書きこむ。

▲「割合」の単元で、歩合を小数で表すといくつになるか、というアドバイスを書きこんだもの。

※基本的に、問題を早く解き終えた子どもは教える側になるが、さらに難しい問題にチャレンジさせることも選択肢として用意しておく。

4. 子どもの教える力はスゴイ!

この実践を繰り返していくうちに、教師顔負けのわかりやすい指導をするミニ先生が現れ、教材開発や教え方の検討会までするようになる。あとは間違った教え方をしないように指導するだけである。